

滝口和男 わん・碗・盃展



まずは、ライティングから。ギャラリーの空間を滝口和男オリジナルの空間に変える。この時間が滝口さんにとって、個展のなかで一番楽しい時間だそうなの・・・。

98年11月27日(金)～12月3日(木)

本館ギャラリー

今回は、滝口さんの個性的な「うつわ」の中から「ちゃわん」に限定して制作していただいた。ギャラリーに集まった「ちゃわん」は、磁器あり陶器あり、信楽の土や萩っぽい土など素材も釉薬も色とりどり、技法も轆轤、手びねり、上絵付け、金彩銀彩、かきおとしなど風合いもさまざま。素材と技法のオンパレードといった賑やかな「ちゃわん」展となった。



すーと手になじむ形は、意識的に変形させるそうだ。完全な円型や球型は、実は手にとって拒否反応を示すようで、いくらか歪んだ形がしっくりくるようだ。粘土の厚みを所々微妙に変えて、意識的に焼成時にたわませることによって、自然なカーブが形成されているのだ。なるほど、いかにも「わび・さび」を演出しましたというわざとらしさを感じさせない自然な「いびつ」は手にとるとしっくりとなじむ。この辺りが、滝口さんのうつわへのこだわりだろう。

また、いずれもユニークなタイトルが付けられている。犬があっかんべーをしている「べー」、蓋に猿が碗にかにが描かれた(さるかに合戦)「対立するものたち」、スーパーマンの兎版が空を飛ぶ「超兎が星へ」などメルヘンチックでユーモラスな絵付けが施された茶碗が多い。何かをイメージして作ったり描いたりするのではなく、現在の自分の中にある情景をそのまま風景にするそうだ。兎を真似して描くのではなく、滝口さんの兎像、猿像とでもいおうか、滝

口和男そのものの作品ができ上がる。

見て楽しく使って楽しい。文句なく楽しいうつわは、また用途を限定しない。お茶を喫むのもよし、ご飯を食べるのもよし、汁ものをいただくのもよし、使いたい時に使いたい気分で楽しく使ってほしい、そんな作者の気持ちがよく現れている「ちゃわん」だ。

そこに滝口さんの語る「茶碗」「うつわ」とは何かが秘められているようだ。決められた作法や流儀を吹き飛ばし、自分の感性で食卓を、空間を豊かにしてくれる道具として「茶碗」や「うつわ」ははじめてキラキラ輝くのではないだろうか。滝口さんのうつわを見ていると食卓で輝く星や飛び跳ねる兔が目に見えるようだ。



第三展示室には、滝口さんの代表作ともいえる「無題」のシリーズを3点展示した。うつわの仕事とは全く異なるタイプの作品だが、滝口さんの紹介には欠かすことのできない作品群であり、今回は無理いって3点ほどもってきて頂いた。

十数年来続くこの仕事は、土の薄い皮膜で覆われた内空間と外空間の関係を凝視めようと意図されたものである。作品の接地面が限りなく点に近く、見ているとフワフワと浮遊するような感覚に引き込まれる。

粘土を5~7mm程度の薄い板を作り、その下に布を引いて、まず四隅を紐で天井から吊るす。布の吊るす箇所を増やしていき、球状に近くなったら土をカットして接合し、造形する。土のなりたい形で形成された造形は、古代の恐竜の卵が命を吹き込まれたかのように生命感が宿されている。

土の性質を自分の造形に無理なく変換させ、滝口和男独自の表現に結実させた比類ない作品である。

彩陶庵 / 白田 豊



